

7月



園だより

令和7年 7月1日
佛教大学附属こども園

「仏教保育 7月のねらい」
ふせほうし
布施奉仕

「やってあげようか？」

こども園での生活は、集団生活です。今月のタイトルの「やってあげようか？」という言葉は子ども同士のかかわりをよく見ていると日常的によく聞こえてくる言葉です。この言葉だけを切り抜くといかにも「やってあげる」というどこか押し付けているような言葉に聞こえなくもないですが、実際に子どもたちが園でこの言葉を使うときの様子はどのようなシチュエーションなのかを紹介します。

5歳児の姿です。友だちのAちゃんが折り紙で飛行機を作っている姿を隣で見ながら、「自分も飛行機を折ってみたい。」そう思ったのでしょう。Bくんは見様見真似で折ってみますが、思うように折れません。だんだん表情が曇ってきたBくんの様子をAちゃんはきっと隣にいて感じ取ったのでしょう。思わず口から「やってあげようか？」の言葉が出ました。うなづくBくん。そしてAちゃんは自分のものを折るときよりも、しっかりと折り目をつけて丁寧に紙飛行機を折り進めます。そして手元をよく見ながら説明します。「ここを折ったら、反対側も折るねん。そしたらまたこっちを折るねん。」そしてひとつの紙飛行機が完成しました。Bくんの表情も晴れやかです。そしてAちゃんはこういいました。「今度は自分で折ってみる？」その言葉を聞いてBくんは挑戦します。その横でBくんの折る様子をAちゃんはじっと見つめ、「そうそう」と言葉をかけています。そしてみごと自分で紙飛行機を作り上げたBくんは小さな達成感を味わっているようでした。

このような姿は折り紙だけではなく、竹馬、着替え…いろいろな場面で見られます。子どもの姿を見て思うのは、子どもは自分の経験の中で嬉しいと思ったことを相手にも感じてほしいという思いを抱いているのではないかと思います。そして、自分のした行為によって相手にも喜んでもらうことがとてもうれしいようにも見えます。「自分で作ると嬉しい」そう思ったからこそ、「やってあげようか？」の言葉の後に「自分で折ってみる？」と尋ねる言葉をかけたのでしょう。言葉で「人のためになることをしましょう」というよりも、日々の関わり合いの中で自然とこのような気持ちを抱くことがどれだけ大切であるのかを子どもたちが教えてくれています。

そうかと思えば、自分が「楽しい」「面白い」と思ってした行為も相手にとっては「いやなこと」である場合もありますね。でもこのようなやり取りの中で、子どもたちは自分とは異なる他者の気持ちに気付いていく大切な経験を積み重ねているのでしょう。「^{ふせほうし}布施奉仕」は「だれにでも親切にしよう」とも言えますが、そこには相手の気持ちをわかろうとすることが前提となります。私たち大人は、子どもたちの気持ちを「どうなんだろう」といつもわかろうとする存在でありたいですね。

副園長 村上真理子

